

(6)事件への反応

2.26事件が鎮圧されると大学はすぐに再開された。だが、戒厳令による集会禁止も完全には解除されず、折からの右翼テロリズムに晒されてきた教員たちの口は重かった。このような情勢にあってこそ、事件に言及すること自体がその人物の知的良心と思想的な「地金」を示すメルクマールとなりうるのである。

たとえば、南原繁(なんばらしげる)は事件後の4月にはじまった東大法学部の「政治学史」講義において、次のような開講の辞を述べた。

「皇軍の私兵化を慨して蹶起した青年将校たちが、まさに皇軍を私兵化する行動をとった。こういう矛盾はどこに由来するか。畢竟、自らの行動の思想的意義にたいする徹底した、しかも客観的な考察が行われなかったことを物語る」。満場しわぶきひとつなく静まりかえった空気のなかで、こうして論点を政治哲学史の課題へと進めてゆく先生の声に学生たちは耳をかたむけた。(『南原繁著作集第四巻 解説』1973年〈『丸山眞男集』第10巻〉)

マルクス主義の洗礼を受けていた大学時代の丸山は、政治を「文化的創業の業」とする南原の政治イメージには反感すら持っていた。だが、精神のもっとも内奥のいとなみである哲学的思索を扱う政治哲学者が、同時代のアクチュアルな動きに果敢に発言する姿に衝撃を受けた。後年、政治それ自体が文化的価値の一領域であると考えたことこそ、南原独自の哲学であるとの理解に至っている。

事件勃発直後に、より直截な批判を行ったのが東大経済学部教授の河合栄治郎(かわいえいじ)

ろう：画像)である。河合は丸山の高校時代に「思想善導委員」を務めており、丸山たち学生は河合のことを「御用学者」とバカにしていた。その河合は事件後の3月9日、『帝国大学新聞』に事件を批判する記事を書いた。記事自体はすぐさま発禁処分になってしまったが、丸山はそのときのことを次のように振り返っている。



全国民が沈黙した時に、河合さんが『帝国大学新聞』に書いたのは、「もし一部の者が武器を持っていることによって他の国民より多くの発言力を得らるるならば、如(し)かず、全国民に武器を分配せんには」というものです。これはすごい。みごとなファシズム批判だと思うんですね。そういう意味では、河合さんの評価というものが一八〇度変わりました。(「1930年代、法学部学生時代の学問的雰囲気」)

河合は丸山の高校時代、文部省の「思想善導」政策に携わっていたため、丸山たち学生は「御用学者」とバカにしていた。しかし、この時期の河合は標的をマルクス主義からファシズムに移し、ファシズムから自由主義を擁護する戦いの先頭に立つようになっていた。丸山は大学2年生のときに河合の特別講義を受講し、ドイツ社会民主党の歴史を学んだ。特に同党における修正主義論争の理解は河合の講義によるものである。